

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26820269

研究課題名(和文) 戦後台湾都市集合住宅における生活様式の解明 在来空間形式の「移植」に着目して

研究課題名(英文) A study of elucidate the lifestyle of inhabitants of urban apartments in Postwar Taiwan

研究代表者

白 佐立 (PEI, Chouli)

東京大学・教養学部・特任准教授

研究者番号：70636571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は戦後台湾都市集合住宅における住民の生活様式を解明するものである。本研究は政府公文書や雑誌記事を利用した文献調査、および南機場アパートメントの住民のライフストーリーや日常生活と空間使用方法の聞き取りを通して、公営住宅の中に、設計者により、住民がそこで生計を立てることができるよう「市場」が設けられた他、住民により、住空間の不足という問題を克服するため「総舗」、「半楼仔」を設け、宗教施設でありつつコミュニケーションの場としての性質も帯びた「廟」を建立されたことが明らかになった。これは、台湾人の都市住宅に「日本」や「中華」など多元的な文化が「移植」されたものと見なすことができよう。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to elucidate the lifestyle of inhabitants of urban apartments in Postwar Taiwan. By analyzing official documents, magazine articles and residents' interviews, this study revealed two facts in public housings. First, architects designed traditional markets for providing a place where inhabitants can own their small businesses. Second, inhabitants built a loft and a raised floor for overcoming problems of narrow space, established temples as religious facilities and places for taking a communication. Elements of "Japanese" and "Chinese" transplanted into people's living spaces can be thought as a characteristic of urban apartments in Postwar Taiwan.

研究分野：建築史・都市史

キーワード：生活様式 台湾 集合住宅 南機場アパートメント

1. 研究開始当初の背景

筆者は 24 年度科研費（研究活動スタート支援）採用課題「戦後台湾の都市住宅における「日本」—戦前の設え・建築技術の継承と生活習慣への影響」において、戦前「日本」との連続的視点から、戦後に新設された都市集合住宅の平面形態、建築構法および住民の空間使用状況における「日本」的特質を解明した。そこにおいて戦後に新設された都市住宅において「和室」を設える習慣がしばしば見受けられること、そして日本統治期に台湾の気候や地震多発という地理的環境などを考慮して形成された「鉄筋コンクリート補強煉瓦造」が戦後にも継承され、現在でもなお使用されていること等を明らかにした。ここから、台湾において近代化の理念のもと建設された公営住宅には、実は様々な在来的な空間形式が「移植」されているという事実を発見したことが、本研究の出発点である。

2. 研究の目的

本研究は公営住宅というミクロな住環境に着目し、そこに見られる様々な「移植」された在来空間形式の特徴を明らかにすることで（モノ）集合住宅における都市住民の生活様式を解明する（ヒト）。これにより都市住民の多くが集合住宅に住まう台湾における、都市居住のあり方及びその特質が明らかになる。加えて、台湾人の都市生活に織り込まれた「日本」や「中華」など多元的文化要素の混淆状況及びその時代的変遷が解明される。これにより為政者の観点から構成されることの多い戦後台湾史に対し、モノから見た社会史・生活史の観点から市井の住民を主体とした歴史を描く。

3. 研究の方法

以上を踏まえて、本研究は戦後台湾都市公営住宅における「建設計画者により移植された在来空間形式」《モノ》及び「住民により移植される在来空間形式」《モノ》から台湾都市住民の生活様式《ヒト》を明らかにするため、文献調査とフィールド調査を組み合わせ、検証を行った。筆者のこれまでの研究およびフィールド調査から、研究対象は建設当時東アジア最大のマーケットであり公営住宅でもあった中華商場（1961 年建設、1992 年解体）及び 1970 年代までに建設された大規模公営住宅（南機場住宅、水源路住宅、斯文里住宅、住安社区、華江社区など計 25 ヶ所、現存）とし、以下の調査を行った。（1）文献調査により、公営住宅の設計意図及びその経緯を検討した。また、戦後から 1970 年代までに建設された公営住宅の建築図面と台湾の伝統的街屋および伝統的漢人市街地の空間形式とを比較し、計画段階で考案され

た在来空間形式の有無を考察した。（2）フィールド調査では、住民の入居以前の生活習慣、ライフスタイルおよび入居後の空間使用状況、及びその変化について聞き取り調査を行った。その内、特徴的な住宅に対しては実測調査を行った。また公営住宅に設けられた市場、廟についても、その成立及び変遷について聞き取り調査を行った。

4. 研究成果

以上の調査において、下記のように、戦後台湾における都市住宅の生活様式が明らかになった。

戦後台湾の公営住宅事業は日本のそれと異なり、1970 年代まで都市に散在するバラック住民への住宅提供が主目的であった。そのため建築計画においてバラック住民がそこで生計を立てることができるよう様々な工夫が施されことから、これら公営住宅建築は一般的な近代集合住宅にはない様々な特徴を有することとなった。具体的には、平均的な公営住宅において、1 階と 2 階はそれぞれメゾネット職住一体型居室とし、典型的な漢人の都市住宅である街屋（ショップハウス）と同様の空間形式を採用した様式が見られる。また伝統的な漢人市街地において、街屋が立ち並ぶ通りに露天を出し、各人が野菜や肉などの食料品を売る「市」のあり方を継承して、地下階、もしくは集合住宅の近くに市場が設置された。

他方、住民の側においても、居住空間に在来の空間形式を持ち込んでゆく。例えば集合住宅内に住民共同出資で廟を建設し、かつて茶館も設けられることがあった。居室には日本統治時代から継承された空間形式「和室」が設えられ、同時に住居の中心には祖先を祀る神桌が配置される。また設えこそないが階段室や廊下を靴脱ぎ場として使用する（階段室・廊下の「玄関化」）。これは日本統治期より家で靴を脱ぐ習慣が定着化している一方で、都市住宅には玄関（靴脱ぎ場）がないためである。このように戦後台湾の公営住宅には様々な在来空間形式の「移植」現象が見られた。

一般の住民を主体とした歴史叙述を構築するために、前述の公営住宅から台北市南西部の万華区と中正区をまたいだ場所に位置している南機場アパートメントで集中的に調査を行った。

南機場アパートメントは整建住宅として、第 1 期（1964 年）、第 2 期（1968 年）、第 3 期（1971 年）に分けて建設されたものである（表 1、図 1）。整建住宅とはかつて台北市内に林立していた違法建築を撤去する際に、元住民を収容するために建設された住宅を指す。整建住宅は住宅不足の解決を第一義目的としたので、狭小な住戸を提供する傾向にあった。このような狭小住宅の中に、大家族が生活するあるいは商売するための空間を

確保しなければならなかった。

	住宅種類(上段:坪、下段:戸)				戸数
	甲	乙	丙	店舗	
1期	13.91 304	12.2 328	8.65 632	0	1,264
2期	12.5 64	10.5 132	8.5 236	6.8 147	
3期	(12-14) 40	(10-11) 173	(8-9) 0	— 46	259

表1 南機場アパートメントの建築概要

注)第一期住宅の床面積が不明のため、1963年から1972年に建設された整建住宅の床面積基準を表記した。出典：台北市政府研究發展考核委員会編『台北市整建住宅改善初步研究』(台北市政府、1992)より筆者作成。



図1 南機場アパートメントの配置(左)

出典：台北市政府研究發展考核委員会編『台北市整建住宅改善初步研究』(台北市政府、1992)をもとに筆者作成。

本研究は住民のライフストーリーおよび日常生活において空間の使い方についての聞き取りを通して、彼らはこの問題を解決する方法として、別の場所に引っ越すことを除いて、(1)半楼仔を設置、(2)総舗を設置、(3)近隣の住戸を買い足す、(4)屋上や庇を利用して増築という4つの手法を利用してきたことを明らかにした。

(1)半楼仔は部屋の上部に作られたロフト空間で、半楼仔の床から天井までの高さは僅か1メートルしかなく、直立できなくても、仕切って「個室」にしようとしていた。また家族が減り半楼仔で寝る必要がなくなってからは、半楼仔を収納空間にする事例があった。(2)総舗は部屋にしつらえた揚げ床の空間であり、ベッドより面積が広い床に家族が雑魚寝する。本省人と外省人が混住する集合住宅の中で、日本統治期に形成され、多くの本省人の生活経験に根付いた総舗が外省人にも利用されているのである。(3)買い足しと(4)増築は生活空間を確保するだけでな

く、資産にもなる。この4つの中で、半楼仔と総舗は伝統的な漢人住居に由来するもので、単なる狭小空間対策の選択肢ではなく、生活経験を通して伝統住居における空間の使い方を、現代的な集合住宅に「持ち込んだ」と捉えることが可能である。またこれらの方法のいずれも当初の建築計画の想定を越えた柔軟な住まい方である。

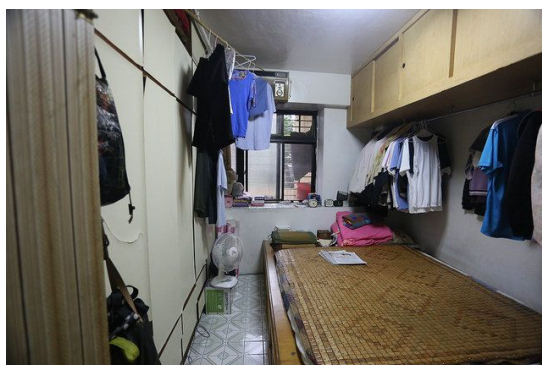


写真1 寝室に作られた総舗。総舗の上に物置が設けられている。

出典：2015年8月27日筆者撮影



写真2 外観からは半楼仔が見えないが、店舗の入口の上方にある小窓は、半楼仔の換気のために設けられたもの。

出典：2015年8月30日筆者撮影

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

(査読あり)

白佐立「狭小集合住宅を生きる 台北市南機場アパートメントにおける生活のかたち」(現代民俗学会『現代民俗学研究』vol.9、2017年) pp.23~38。

(査読なし)

白佐立「台湾建築史における『戦前』と『戦後』」(日本建築学会建築歴史・意匠部門編『東アジア近代建築史研究の回顧と展望 『東アジアの近代建築』から30年』日本建築学会、2015年11月) pp.66~67。

白佐立「戦後台北市における露店管理と市場：公有市場から攤販集中場へ」(日本建築

学会『日本建築学会学術講演梗概 2015(建築歴史・意匠)』、2015年9月) pp.69~70。

白佐立「1950年代台北市内の違章建築の立地について 戦後台北市都市計画の前提条件として」(日本建築学会『日本建築学会学術講演梗概 2014(建築歴史・意匠)』、2014年9月) pp.177-178。

〔学会発表〕(計3件)

白佐立「台湾建築史における『戦前』と『戦後』」(シンポジウム「近代建築史の最先端」第11回東アジア近代建築史研究の回顧と展望『東アジアの近代建築』から30年)2015年11月29日、建築会館(東京都港区)。

白佐立「戦後台北市における露店管理と市場：公有市場から攤販集中場へ」日本建築学会大会、2015年9月5日、東海大学(神奈川県平塚市)。

白佐立「1950年代台北市内の違章建築の立地について 戦後台北市都市計画の前提条件として」日本建築学会大会、2014年9月13日、神戸大学(兵庫県神戸市)。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白佐立(PEI, Chouli)
東京大学・教養学部・特任准教授
研究者番号：70636571